日本古典文學大系65

歌論集　能樂論集

岩波書店刊行

日本古典文學大系65

歌論集　能樂論集

久松潛一
西尾實　校注

岩波書店刊行

歌論集 能樂論集　　日本古典文学大系 65

昭和 36 年 9 月 5 日 第 1 刷 発行 ©
昭和 51 年 6 月 15 日 第 16 刷 発行

定価 2300 円

校注者　久松潜一（ひさまつせんいち）
西尾実（にしおみのる）

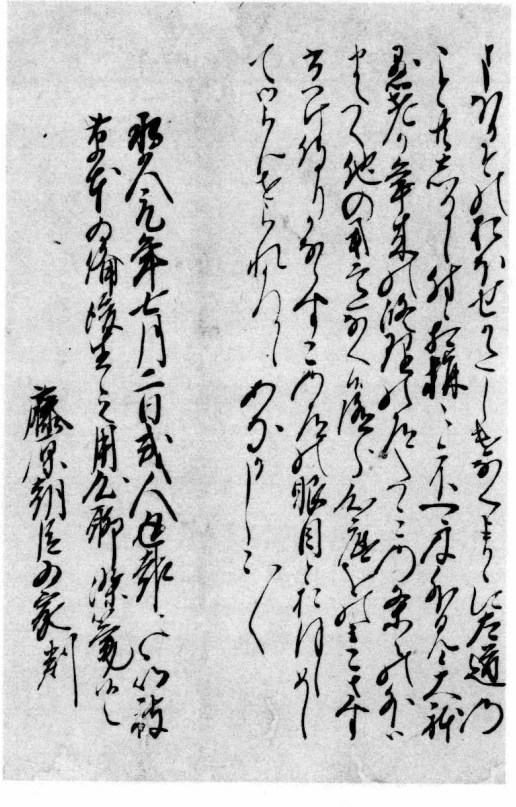
発行者　東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
岩波雄二郎

印刷者　東京都青梅市根ケ布 1-385
白井倉之助

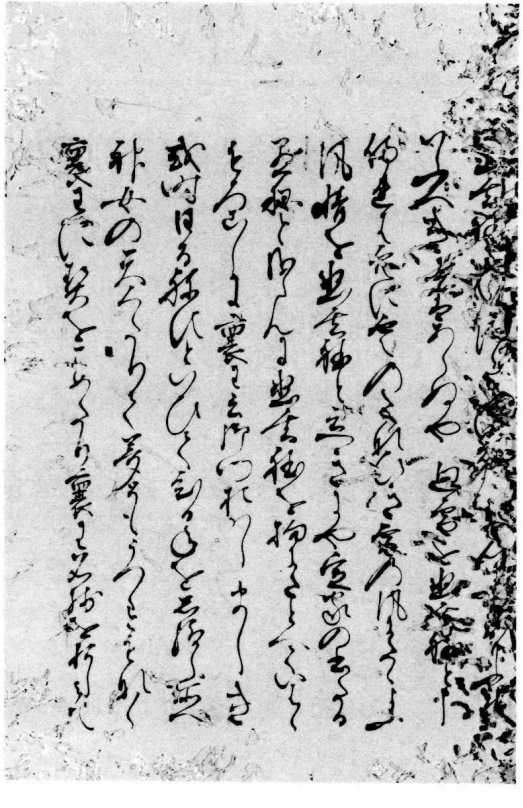
発行所　東京都千代田区一ツ橋 2-5-5　株式会社 岩波書店

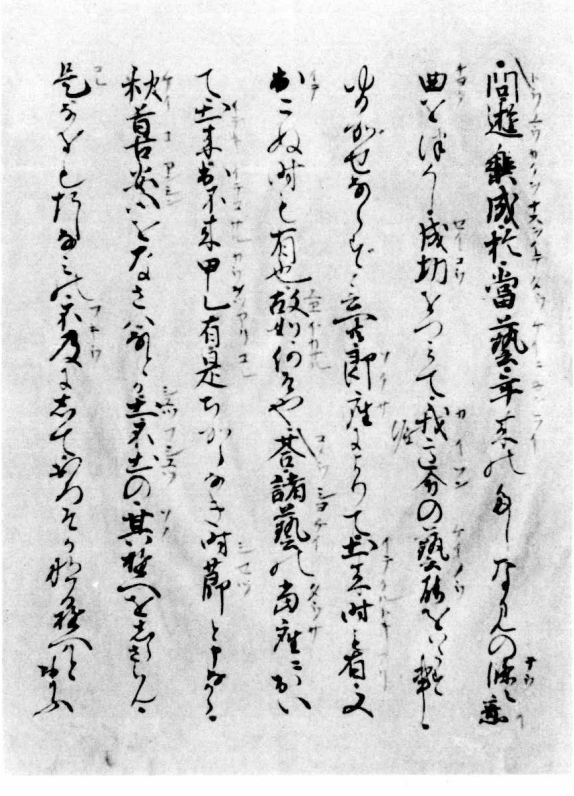
落丁本・乱丁本はお取替いたします

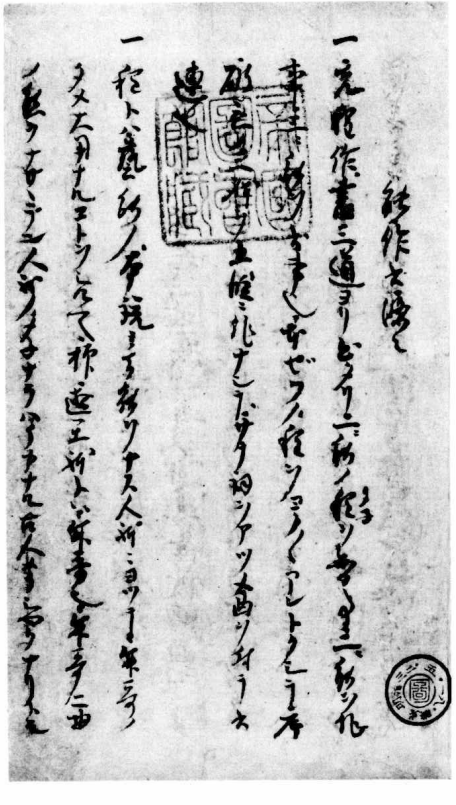
毎月抄　傳道増法親王筆本



正徹物語　東素珊筆本







此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

歌論集

（久松潜一校注）

解説……五
凡例……三
新撰髄脳……二五
和歌九品……三一
無名抄……三五
近代秀歌……九九
詠歌大概……一一三
毎月抄……一三五
後鳥羽院御口伝……一四一
為兼卿和歌抄……一五三
正徹物語……一六五

補注……二三五
校異……二八五

能楽論集

（西尾　実校注）

解説……三一
凡例……三三七
風姿花伝……三四一
至花道……三九九
花鏡……四〇九
遊楽習道風見……四二九
九位……四四七
拾玉得花……四五三
三道……四六九
申楽談儀……四八三
補注……五四七

歌論集

久松潜一
校注

解説

歌論の展開

古代中世の主要な歌論書の解説を書くはじめに、古代から近世に至る日本歌論の展開を概説しておきたい。日本文学評論のうちで、歌論は最初に成立し、それ以後も近世までは歌論がその中心的位置を占めている。それは和歌が長く生命を支えてきたのと一致している。もとより歌論の成立は、和歌に対する自覚から生じたのみでなく、飛鳥時代から奈良時代にかけて中国の文献が将来され、詩学の方でも「詩経」についで六朝時代の「文選」をはじめ詩学の書物も伝来し、それらの刺戟をうけて懐風藻や万葉集が編纂され、「歌経標式」等も著されたのであるから、六朝詩学の影響ということも考えられねばならない。空海の「文鏡秘府論」が著されたのも六朝詩学が日本文学評論の成立の上に占める位置を想定させるのである。そうして歌論の歴史を通して、歌に対しての理論の展開とともに、歌人が詠作のための作法を学び、表現の技術を修得させるために書かれた歌論が多いことはいわゆる歌論書の性格を雑然たらしめ、和歌作法書とさせている。しかしなおその中に、歌に対する理論や、歌人や作品に対する具体的な批評も多く見られるのである。そうして数多く書かれた歌論書や歌学書を整理し、歌に対する理論の展開を跡づける日本歌論史は重要な研究課題となっている。

このような日本歌論史を史的に区分する時、古代・中世・近世・近代・現代の五期にわけることができる。古代は奈良時代の終りから平安時代をさし、中世は鎌倉・室町時代をさし、近世は安土桃山時代から江戸時代をさし、近代は明治大正時代、現代は昭和時代をさす。これらの時期にわかつ理由と、その境をどこに置くかということは、「日本文学評論史」や私の編した「日本文学史総説年表篇」にゆずっておく。

古代歌論

評論史における古代のはじめは、文学創作よりは遅れて奈良時代の中期頃からであろう。この頃、「詩経」

「文選」らの影響をうけて懐風藻が編まれ、山上憶良の「類聚歌林」が編纂され、更に「人麻呂歌集」その他の私家集も編まれるに至ったが、こういう撰集を編纂しようとすると、歌をどのように分類するか、また歌の選択などの必要から、おのずから歌に対する自覚や批評意識が生ずる。万葉集の編纂は一層そういう傾向を推進したのであって、宝亀三年藤原浜成によって「歌経標式」が著される基盤は十分存在したのである。この機運はそのまま平安時代にうけつがれる。

平安初期は漢詩文の隆盛から、文華秀麗集・凌雲集・経国集などの漢詩集の撰定とともに、詩学書である空海の文鏡秘府論も書かれるのであるが、この漢詩文隆盛から再び大和歌復興の機運が起ってくる。延喜五年の古今和歌集の撰定は和歌史上に劃期的意義があるが、その序は歌論史の上にも大きな意味がある、漢詩論の影響をうけつつ、大和歌自体の基準や美を見出そうとする点が見られる。真名序と仮名序との先後の問題があるが、紀貫之の歌論を古今集仮名序に見ることはできるし、古今集序のそれ以後の和歌・歌論への影響は大きい。

それ以後多くの髄脳が作られたが、喜撰式・孫姫式・石見女式らは、現存の本は仮託の書としても、忠岑十躰は正しいと見られる。殊に藤原公任の「新撰髄脳」「和歌九品」は、和歌に立脚した歌論の書として平安中期を代表している。この頃に「あはれ」を中心として、「をかし」「たけ高し」の美的理念も確立し、枕草子や源氏物語もそのような美的理念のもとに書かれている。そして平安後期になると、「あはれ」の美的理念の確立とともにその固定化が生じ、貫之・公任の伝統をそのままに守ってゆこうとする保守派の藤原基俊も重んじられ、悦目抄は現存本は仮託の書とするも広くよまれたが、それに対して「あはれ」よりも「たけ高し」の美を重んじ、清新な叙景とともに詞の自由を重んじた、源経信やその子源俊頼が一方に重んじられる。経信の難後拾遺や、俊頼の俊頼口伝(俊秘抄ともいう)にその歌論が見られる。また六条家の顕輔、その子の清輔や、猶子顕昭らも革新的傾向に近いが、その歌学書は知識的傾向が多い。清輔の奥義抄・袋草紙は歌学的知識がゆたかである。上覚の和歌色葉も同様である。

平安時代の初期から行われた歌合は、その形式の完備するにつれて、歌の批評の上に重要な意義をもち、また歌合の判のために批評の基準を求めることが多く、歌論そのものをも進展せしめた。そして平安後期においては、歌論の保守的傾

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

向も革新的傾向も歌合の判詞を通してのべられることが多く、歌論史の上に重要な意義を有する。このような保守と革新との両者を綜合して古代歌論の結びとするとともに、中世歌論の先駆となったのが藤原俊成の歌論である。

中世歌論　古代から中世への展開には藤原貴族の衰退と武士の興起による封建制の確立ということが挙げられる。特に平家の興亡の速やかな点は、人生の無常を感ぜしめ、それが仏教によりすがる中世思想を成立せしめ、歌論をも思想的傾向の多いものにした。幽玄や有心や無心が中世美の中心になって来たのは、余情即ち情趣象徴ともいうべき表現を重んずるに至った点もあるが、無常の中に永遠を求める人生観的なものを根柢としているためであると思う。藤原俊成はその九十一年の生涯において四十二歳までを古代に生き、四十三歳の時の保元の乱を境として中世に入り、平家全盛の二十数年を生きぬいて七十歳頃に平家の滅亡となり、それからの二十年を鎌倉期にすごしている。このような世の推移の中に人間形成を行ったのが歌論に反映している。古来風躰抄において和歌の歴史的変遷をとき、二十余種に及ぶ歌合の判詞に「心ほそし」「姿さび」・幽玄の美論をといている。俊成の歌論は子の定家によってより進展せしめられている。俊成と定家とは人間としても歌論としても相違している点はあるが、中世的という点では共通している。「近代秀歌」「詠歌大概」「毎月抄」によって定家の見解は知られるし、その他の「愚秘抄」「三五記」「桐火桶」等の歌論書は仮託の書が多いが、なお定家の見解はその間に見ることが出来る。有心体を中心におく和歌十躰や、秀逸体・余情妖艶・古詞新情等の見解は、俊成の歌論とは異なった意味で注目される。また俊成・西行を重んずるとともに、新古今集の撰定に深い関心を有された後鳥羽院の歌論書「後鳥羽院御口伝」は、順徳院の「八雲御抄」とともに、重要な意義を有しており、俊頼・俊恵の流れをくむ鴨長明の歌論書「無名抄」は、俊成・定家に比べると傍流の感はあるが、近代歌体の条をはじめすぐれた見解が見え、逸することが出来ない。定家の子為家は歌の家の上で、その子為氏が二条家、為教が京極家、為相が冷泉家のはじめとなった点でも重要な意義を有している。その歌論「詠歌一躰」は平淡味を説くとともに制禁の詞を説いている点で注目されるが、広本・略本があり書物として問題を蔵している。二条・京極両家の対立は鎌倉期に著しいが、京極為兼の「為兼卿和歌抄」は玉葉集の基準を知るためにも重要な意義を有している。これに比すると二条家の為世には「和歌庭訓」が

あり、「野守鏡」も二条家系統の歌論書であるが、その理論の上ではとるべき点が少い。「延慶両卿訴陳状」は二条・京極両家の対決を知るためにも注目される。

吉野時代では京都にとどまった二条家の見解を知るために頓阿の「井蛙抄」や二条良基の問に頓阿の答えた「愚問賢注」、及び良基の「近来風躰抄」がある。吉野の方にいた長親は、宗良親王を助けて新葉集をえらんでおり、南北朝合一後、京都に在って「耕雲口伝」を書いているが、耕雲口伝の成立はすでに室町時代に入っており、二条家を越えた仏教的歌論である。京都では冷泉家の為秀があるが、歌論を書いてはいない。

室町時代になると、為秀の門である今川了俊が、九州探題を免ぜられて京都に帰った後幾多の歌論書を書いて、冷泉家の為相・為秀を擁護している。「和歌所へ不審条々」「弁要抄」「落書露顕」その他数多い。了俊の歌論は万葉集を重んずる点で為兼に近いが、為兼が万葉集の真情を重んじて、しかも「詞のにほひゆく」のを認める所から新古今集の意義をも認め、両者の綜合の上に玉葉歌風を建てようとしたほどの深さはない。二条家批判が多くて創造的な点が少い。了俊の弟子になった正徹は、二条冷泉家などを越えて定家を重んじ、定家の余情妖艶の歌風をうけつぐとともに、歌論の上で幽玄を重んじ、しかもそれを余情妖艶として理解した。「正徹物語」は歌論書としてその見解をのべるとともに、随筆的発想のもとに、万葉集や源氏物語・枕草子・徒然草などに対する文学的理解を示している。正徹は北山時代に生活して花やかな点があるが、応仁乱後における心敬や宗祇になると、同じ幽玄を重んじながら花やかさを抑えたひえさびの美をとき、幽玄をもそのように解している。ただ心敬・宗祇は連歌論が主となっており、心敬の「さゝめごと」、宗祇の「吾妻問答」「老のすさみ」にしても連歌論である。歌論としては東常縁の「東野州聞書」などあるが注目されるものは少い。このようにして中世の歌論は「正徹物語」を頂点として、それ以後は連歌論に圧倒されるのであり、わずかに古今伝授などによって歌の家を伝えている。

近世歌論　近世のはじめは安土桃山時代からはじまる。この頃に歌論としては細川幽斎の「詠歌大概抄」や「細川幽斎聞書」等があるが、幽斎は古今伝授を伝えており、二条家風の歌論をといている。これに対して木下長嘯子は、万葉集

を重んじて、為兼・了俊の系統を伝えている点がある。長嘯子の「挙白集」に対しては難挙白集等種々の論難があり、それに対する弁護も現れている。この長嘯子の見解を重んじたのが下河辺長流や契沖であり、万葉集尊重の精神が見られる。戸田茂睡は、「梨本集」等によって中世の制禁の詞の意義なきことをといているが積極的な見解には乏しい。契沖らの見解をうけついで田安宗武や賀茂真淵は万葉集を重んじている。ただ宗武は儒教的見地から「ことわり」をとき、和歌よりも漢詩を重んじている点がある。真淵はそれに比して、真情を重んじて「ことわり」を非難し、両者の間に見解の相違があるが、万葉集を古今集や新古今集より重んずる点では共通する。そうして田安宗武に仕えた荷田在満が寛保二年三十七歳の時に国歌八論を書いて、新古今集を重んじ歌の「わざ」をといたのに、宗武が反論したのが、国歌八論余言であり、それに対して在満が更に論じたのが国歌八論再論である。真淵もこの論争に加わって宗武の説に従いながら、また真情と理とについての両者の相違を説いている。真淵は、万葉考総論・「歌意」「新学」によってその万葉主義の歌論を主張している。一方真淵の弟子の本居宣長は、歌論においては「排蘆小船」や「石上私淑言」で「あはれ」を歌の中心におき、新古今集を重んじている。その点で在満の技巧主義に共通する。ただその宣長はわざや技巧を重んずるが、心を一方にとき、真情の表れはおのずからあやや技巧がともなうとする。また真実な感動であれば、それを人に伝え同感を得ようとして、そのために技巧を加えるとしている。これは真情があれば「詞のにほひゆく」と説いた為兼の歌論にも共通するものがある。

近世では、万葉尊重と新古今尊重の外に古今尊重の歌論がある。京都は堂上派の勢力のあった点から、古今集を重んずる傾向が強く、京都を中心として活躍した小沢蘆庵・香川景樹・富士谷御杖は、いずれも古今集を重んじている。蘆庵は冷泉為村の門に入ったが後に独自の歌論をうちたてた。「あしかび」「ちりひぢ」「或問」「ふりわけ髪」その他において古今集のただことうたを説き、ただことのうちに深い心の表れた歌を重んじた同情新情論は、注目すべき見解である。真実の感動であれば、何人にも共通して同感されるとするのが同情論であり、感動は真実であれば常に新しいとするのが新情論である。景樹は調を重んじ、「歌は理るものにあらず調ぶるものなり」として古今集の調を重んじている。「詠草奥書」

「新学異見」などにその見解がのべられている。真淵が万葉の詞を用いるべきであるとするのを退けて、現代の語を用いるべきことを説いているが、調の上で雅びの調を重んじ、それは古今集の調によるべきであるとしている。景樹の主張は広く行われ木下幸文・熊谷直好・八田知紀などが出てその歌論もうけつがれている。蘆庵・景樹に比して、孤立してすぐれた見解をのべたのが富士谷御杖である。御杖は国語学者富士谷成章の子で独創性に富んだ歌論を発表している。「和歌六運弁」では和歌の展開を六期に区分してといており、和歌史論として注意されるが、真言弁では歌の根本を真言としている。しかもその真言を説くに論理的である。御杖によると、心と言と事との関係は、心の現れが「こと」であるが、言と事とは言霊によって一体である。また真心の現れが真言であり、真事でもある。そうして心を偏心・一向心・公心・真心などにわけ、偏心は一方に偏した利己的な心であり、一向心は感情本位の心であり、公心は理性本位の心であり、真心は感情と理性との自然に一体となった心であるとする。そういう真心の現れが「まこと」であるが、それは言と事とが一体である。こういう「まこと」は歌によって得られる。行為をも、空わざ・私わざ・公わざ・真わざ等にわけて心と対応せしめている。その他、時宜と畏愛を重んずるなど極めて理論的である。

この他近世歌論では歌格の研究も注意すべく、小国重年の「長歌詞珠衣」、橘守部の「長歌撰格」「短歌撰格」、六人部是香の「長歌玉琴」、鹿持雅澄の「永言格」などそれぞれすぐれている。五七調を重んじ、対句を尊重して、そういう点から万葉集の歌を最も格の正しい歌とする。これは心を重んずる傾向と、詞を重んずる傾向をば格という点から調和せしめようとしている。近世歌論は、万葉集と古今集と新古今集とのいずれかを基準としている点から、古典主義的歌論とも言えるが、理論は明快であり、中世歌論のような含蓄さと曖昧さがない。そこに近世歌論の特質がある。

近代歌論と現代歌論とはここでは略するが、他の文学論と同様に、西欧の文学理論をとり入れて精緻になっている。しかし和歌や俳句は伝統性が著しく、それだけに今までのべて来た古代・中世・近世の歌論が多く影響している。正岡子規の歌論なども万葉尊重論を、写生というより所をおいて説いている。その他の歌論にも伝統によるところが多い。

以上概観してきた古代・中世・近世の歌論から、それぞれ代表的な歌論書を収めた。古代では藤原公任の「新撰髄脳」

と「和歌九品」を収め、中世では鴨長明の「無名抄」、藤原定家の「近代秀歌」「詠歌大概附秀歌躰大略」「毎月抄」、後鳥羽院の「後鳥羽院御口伝」、京極為兼の「為兼卿和歌抄」、正徹の「正徹物語」を収めることにした。近世では賀茂真淵の「歌意」、富士谷御杖の「真言弁」を収める心組であったが、紙数の関係上、省略することにした。

つぎに本書に収めた九の歌論書の底本・校合本およびその他の主要な伝本について略説する。

新撰髄脳

1 新撰髄脳（橋本研一氏蔵）写一冊　枡形本　胡蝶装　表紙には「新撰髄脳」、内題には「四条大納言新撰髄脳」とある。奥に「雅有卿在判」とあり飛鳥井雅有の書写した本の系統である。つぎに、

明暦二年閏四月九日以山門本性院之本於大原山来迎院之草庵令書写之　　槃柴（花押）

とあるのは書写の年月を示している。本文所々脱字があり「もかり船」の歌は存しない。本書の底本とした。

2 新撰髄脳（続群書類従本）　奥に、

御本奥書　以祖父入道大納言為家卿自筆本令書写畢、尤可為証本矣　　参議藤原朝臣為秀

とあり、為家自筆本を冷泉為秀が書写した本の系統である。雅有本に比して本文の従うべき所がある。

3 新撰髄脳（古語深秘抄本）　奥書はないが続群書類従本に近い。

4 新撰髄脳（日本歌学大系本）　識語によると久曾神氏蔵本を底本とし、橋本氏蔵本・書陵部蔵本・古語深秘抄本等で校合を加えてある。

5 新撰髄脳（公任歌論集本）　続群書類従本を底本とし、橋本氏蔵本・古語深秘抄本・歌学大系本を以て校訂した。

和歌九品

1 和歌九品（伝道増法親王筆）写　毎月抄と併せて一巻とした巻子本。室町時代の書写で、和歌九品の写本としては古い。イとして所々校異が加えてある。本書の底本とした。

2 和歌九品（静嘉堂文庫蔵）　本書の校合に用いた。

3 和歌九品（群書類従本）

4 和歌九品（公任歌論集本）　伝道増法親王筆本を底本としている。

5 和歌九品（日本歌学大系本）　群書類従本を底本とし、奥義抄所引の逸文で校合を行っている。

6 和歌九品（『日本歌学の源流』所収）　奥義抄所引の本文を底本とし、群書類従本および井蛙抄所引本文により校合を行っている。

無名抄

1　無名抄　（静嘉堂文庫蔵）　江戸初期の書写、奥書はない。目録も各段の見出し語もない。蔵書印に「八雲軒」（脇坂淡路守安元）・「松井氏蔵書印」（松井簡治博士）他がある。見出し語のないのは古い形を示していると思われる。本文は大体においてすぐれているが、脱落した箇所がある。本書ではこの本を底本としたが脱落した部分は書陵部蔵本で補った。

2　無名抄　（蓬左文庫蔵）　写二冊　室町末期の書写、奥書・中目録（題目と記す）はあるが、本文中には見出しはない。

3　無名抄　（書陵部蔵）　写一冊　江戸初期の書写、本書・作者について識語がある。目録・見出しはない。蔵書印は「斎藤宗家之書」「桜門」他。裏表紙見返しに「蒲生氏」。底本とほぼ同系統。

3　無名抄　（東大図書館蔵）　写一冊　江戸中期頃の書写、奥書・目録はない。見出しは本文肩に小字で記す。蔵書印は、「阿波国文庫」「陽春廬記」（小中村清矩）「南葵文庫」。

4　無名抄　（内閣文庫蔵）　写一冊　江戸中期頃の書写、奥書・目録・見出しがある。源直頼書写本の臨写本か。蔵書印は、「和学講談所」「書籍領印」「浅草文庫」他、流布板本と同系統。

5　無名抄　（流布板本）　家蔵本は富岡鉄斎蔵書印がある。

6　無名抄　（天理図書館蔵、竹柏園旧蔵）　日本歌学大系はこの本を底本としている。応安四年の奥書がある。

7　無名抄　（静嘉堂文庫蔵）　奥に「鴨長明抄」として元亨の年号が見える。

8　無名抄　（梅沢彦太郎氏蔵）　一巻　鎌倉時代の書写、項目は朱で書入れてある。本文はやや異同がある。

近代秀歌

1　近代秀歌　（自筆）（大田文弘氏蔵、酒井家旧蔵）　写一冊　美濃紙半截本　奥書に「此本曾祖父入道中納言定家卿筆跡也。尤可秘蔵、々々々。参議兼侍従藤（花押）」とあって、為秀が定家の自筆たることを認めているし、筆蹟から見ても定家自筆たること疑ない。遣送本と異なって二十六首の歌はなく、その代りに六十八首の歌が記されてある。これは秘々抄本によって十五首が補えるのであるがこの本の脱落は了俊の加えた奥書に「歌以下少々被書落歟」とあって早くからあったことが知られる。昭和六年佐佐木信綱博士解説の複製がある。また昭和三十四年現所蔵者大田文弘氏の許可を得て、秘々抄本との校異を付して校注者が刊行した。本書の底本とした。

2　秘々抄　（家蔵）　写一冊　美濃紙判　遣送本にある二十五首（他の遣送本では二十六首もしくは二十七首）の歌があり、それについで自筆本の八十三首（現存自筆本では六十八首）の歌がある。「ある人のうたは」云々はそのつぎにある。室町末期の書写と認められる。吉沢義則氏旧蔵の近世書写の一本もある。

3　定家和哥式　（古語深秘抄本）　奥書に、

承元之比自征夷将軍依先人所注遣之秘本也
弘長二年九月老後更書写之
三代撰者桑門融覚在判

とあり、近代秀歌は実朝に送ったものとわかる。この本はその次に

以祖父入道大納言自筆本令書写訖、最可為証本矣
参議藤原為秀在判

とあって、為家の自筆本を以て為秀が書写せしめたことになる。これからすると自筆本も遣送本も為秀の所にあったので、為秀の門人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com